

政治史の復権をめざして——はじめに

坂本 一登

本書は、「日本政治史の新地平」と題し、日本政治史の新たな学問領域を切り拓き、政治史の「復権」をめざして執筆された、一六本の論文から構成されている。

最初に、政治史の「復権」について、少し触れさせていたきたい。

英国の歴史家エルトンは、政治史を、社会の内部あるいは複数の社会の間において、権力がいかに獲得され、獲得された権力がいかに行使されたのか、換言すれば、権力の運命について叙述するものと定義した。政治史は、本質的に闘争の物語で、少なくとも相互作用の物語で、互いに対抗したり妥協したりしている人間の歴史であり、競いつつ共存している様々な社会の歴史でもある。そして政治史家は、政治的に何が起こったのかということに深く関わり、何が起こったのかを厳密に知ろうとしてきた、と。^①

しかし、エルトンが『政治史とは何か』を書いた四十余年前でさえ、本場であるはずの英国でも、すでに政治史は人気のある歴史ではなかった。エルトンは、こう書いている。「政治史の著述は、たとえそれが確立され十分基礎づけられているものであれ、現在ではやや日陰の身である。すくなくともくろうとの歴史家の幾人かは、政治史がかなり旧式で明らかに不十分な——つまらなくさえある——研究分野であると考えがちである」^②。

こうした趨勢は強まりこそすれ弱まることはなく、近年、英語圏の歴史学界を席巻したポストモダンリズムに対して、『歴史学の擁護』^③を上梓して近代歴史学とその方法を弁護した社会史家エヴァンズも、政治史家エルトンを引

用するときは、真面目だが古風でやや頑な歴史家の代表として登場させがちである。そして日本においても、戦後の歴史学界を風靡したのは、社会経済史や民衆史であり、政治史ではなかった。⁽⁴⁾

政治史が不評の理由はいくつかあろう。たとえば、権力の獲得や行使に関わるのは、あるいは政治という活動に携わるのは、概して少数の指導的人物であり、政治史は必然的にエリーートの歴史となり、社会の大部分やエリート以外の人間の営みを視野から落としてしまう。またエリーートの歴史は、しばしばその時代や社会の支配的な物語、すなわち神話を作り出し、権威的で抑圧的な性格を帯びざるをえない、と。

こうした主張に、一面の真実があることは否定しがたい。確かに、いつの時代であれ、どんな社会であれ、政治が少数者の活動であることは、事実である。だが、政治が少数者の活動であることは、それが少数者にしか重要性をもたないことを意味しない。想像力を少しめぐらせるだけで、君主であれ民衆であれ、否、社会全体の運命が、政治に関与している人々の行為によって、影響され決定されることは明らかであろう。その意味で、政治史は、不人気であろうと、依然として重要な歴史の一分野であることは動かない。

また、政治史は、神話を形成するよりも神話に抵抗することで、人々を惹きつけてきた。実際、政治史は（これは経験的な歴史一般にあてはまるものであるが）、同質的なものの中に異質なものを見いだし、過去を過去の眼差しで眺めることによって、現在と過去の間の相違を強調してきた。単純化しすぎること嫌悪し、過去が通常予想されるよりもはるかに複雑で、歴史を超越する大きな物語には容易に包摂されえない、独自の意味をもつ存在であると主張してきた。その意味で、政治史は、本質的に抑圧の物語ではなく、むしろ神話と歴史との間にけじめをつけ、神話の代わりに厳密な資料に基づく歴史を再現することに意欲を燃やしてきたのである。

しかしながら、政治史の重要さは、魅力の自明さを保証するものではない。ポストモダニストの歴史学に対する異議申し立てを、知的誠実さをもって検討したエヴァンズの行き着いたところは、ランケを始祖とする近代歴史学の方法の正当さと歴史叙述の重要さの再確認であった。そして政治史の課題もまた、一部は歴史叙述にかかわるも

のであるように思われる。

エヴァンズは、歴史叙述の難しさの一端を彫刻家の比喩で次のように説明している。「歴史物語はたいいてい、歴史的過去と歴史家自身の精神から現れ出で、作り直され、構築され、脱構築された物語の混合体である。歴史家が一塊の荒削りな石を彫像にまでつくりあげる。その彫像が石のなかで発見されるのを待っているのではない。彫像を作るのは歴史家自身なのである。できあがった彫像とは別な彫像を刻み出すことももちろん可能である。他方で、歴史家は掘り出したままの石の大きさや形だけでなく、石そのものの種類にも制約される。無能な彫刻家の手にかかると、本来の姿とは似てもつかない、迫力を欠く彫像になってしまっただけでなく、彫り込みすぎたり、ハンマーで叩きすぎたり、手元が狂ったり、石もろとも粉みじんに壊してしまったりという失敗を犯してしまうことになる」⁵⁾。

政治史は現在、一見相反する二つの難題に直面している。政治史は、対象となる指導的人物が比較的少数で資料にも一定の制約があり、かつ物事が生起する時間的な流れに厳密に制御されるため、一旦有力な叙述が成立すると、その後は大同小異の退屈な物語が繰り返されることになりかねない。また反対に、そうした凡庸さへの反省から、隣接する社会科学に意欲的に接近し、さらに資料の発掘に没頭すると、今度は大量の研究業績と膨大な資料に取り囲まれて、それらをひとつの整合性のある物語の中に織り込むことが困難になってしまうのである。

それでは我々は、一体いかにすれば、過去を生気ある物語として蘇生させることができるのだろうか。これまで歴史学の先達によって、様々な助言がなされてきた。それらは、いずれも真剣に耳を傾け、心に留めるに値するものである。⁶⁾ それにもかかわらず、誰にも適用可能な簡便な妙策が存在するわけではない。おそらく叙述を行う際には、文学的技能や創造的統合力が不可欠であることを自覚し、試行錯誤を重ねながら、叙述という方法を意識して深めていく他ないのだろう。歴史資料に沈潜すれば、自動的に過去が蘇るわけではない。歴史家は誰でも、歴史学の作法を守りながら、歴史的理想力を駆使して資料と対話し、能動的に問いかけ、自己の関心や価値観に従って、

生き生きとした物語を造形しようとする。大切なのは、平凡でも、その対話の過程により内省的となり、文学的技法や社会科学理論を学びつつ、生や死についての感覚、ものごとや時間の変化についての感覚など、人間性や人間の社会的存在に対する共感の感覚を磨いていくことなのだろう。

ともあれ、政治史家は、政治史が重苦しく退屈でうつつとういしいものとは限らないということを、思い出してもらう努力をしなければならぬのである。

本書は、そうした課題の完全な達成例ではないかもしれないが、政治史を少しでも魅力的で豊かなものにしようと試みた一つの実践例として、読み応えのある論文集になっているのではないかと思う。

最後に、本書の構成を紹介する。本書は、明治初年から現代までの日本政治史を対象とし、多様なテーマと視角から分析したものである。全体は四部に分かれる。各論文の要旨については、「おわりに」を参照していただくこととし、ここでは各部の概要についてごく手短かに触れておきたい。

第Ⅰ部は「立憲政の潮流」と題して五本の論文から構成される。最初の三本は、明治初年に立憲政が模索される過程について検討したもので、坂本は、大久保利通と比較して影が薄いとされる木戸孝允を中心に、その再評価も交えつつ、立憲政導入の政治過程を再検討する。五百旗頭と塩出は、ともに当時の言論空間に焦点をあて、五百旗頭は新聞界を牽引した福地源一郎の言論活動を漸進主義の視点から、塩出は江華島事件をめぐる諸新聞の論説を政治的コミュニケーションの形成という視角から、それぞれ分析して立憲政の導入に対する含意を論じた。また西川は、立憲政治の導入と表裏の関係にある宮中の制度化の中で創設された内大臣の実態を、宮中府中の別や常時輔弼の意味を吟味しつつ解明し、浅沼は、日本の立憲政に刺激をうけた清朝の中央官制改革の実相を明らかにし、その人材抜擢の機運が清朝官界にいかなる衝撃と政治的帰結をもたらしたかを考察した。

第Ⅱ部は「政党政治の展開」とし、結果として政党内閣制と二大政党制へと収斂していく政治過程を三本の論文

で論究する。千葉は、政友会に対抗するべく計画された桂新党が、いかなる構想から始まり、いかなる経緯の末に立憲同志会という形に落ち着くのかを追求した。清水は、実際には多党的だった当時の政党政治が、二大政党制に収斂していくきっかけとなる第一回総選挙を分析し、中央から相対的に自立した地方の動向が、政党再編の重要な伏線となったことを指摘した。村井良太は、在野の運動家である市川房枝を取り上げ、婦人参政権運動の視角から、一九二〇年代の確立期から三〇年代の没落期にかけての政党政治の実態と政党政治への期待を照射した。

第三部は「戦後体制の模索」を、四本の論文で考究した。これまで戦後政治の中心として論じられてきた吉田路線とは一線を画する非吉田路線の系譜を発掘し、戦後体制の形成をより立体的に解明する。武田は、増田甲子七が主宰する自由党の機関誌『再建』を中心に、保守陣営の政界再編に影響を与えた、一九四〇年代後半の吉田とは異なる保守構想の諸相を分析した。村井哲也は、経済政策の決定過程の分析を通じて、吉田によって政策決定過程から分断されていた与党が、複雑な経緯の末、事前審査制を導入して自民政権の統治手法を確立する過程を論究した。黒澤は、旧内務省の復活をめざす内政省構想や非吉田系の河野一郎が主張した行政改革構想の挫折から地方行政に特化した自治省が誕生することを明らかにする。河野は、非吉田系の系譜に連なる、岸信介内閣の安保改定交渉における条約適用地域問題に着目し、条約地域に沖縄・小笠原を含むかどうかの錯綜した議論が当時の日本外交にもつた政治的意味を考察した。

第四部は、「地方の諸相」と題したが、中央政治を離れて、行政史や社会史あるいは地方史の分野に踏み入り、政治史の領域の拡大を試みたものである。松本は、地方利益の中で独自の展開をとげた水道問題を取り上げ、戦前の水道政策が、市町村公設主義を標榜したため、給水問題が都市間競争や地域拡大の契機となったことを神奈川県 の事例で明らかにした。中静は、国民健康保険制度が創設された一九三〇年代後半から戦後の五〇年代にかけて、保険直営診療施設の設置問題が、地域政治にとって、また国民健康保険制度にとって、いかなる意味をもったかを追究した。土田は、東京オリピック直前の一九六〇年代初頭、社会問題であると同時に国際問題にもなりつつあ

った交通戦争について、政治と行政がいかに対応したのかを、その限界も含めて、自民党の有力者川島正次郎を中心に解明した。そして佐道は、大田革新県政時代、副知事の吉元政矩によって推進された沖縄の自立化構想である国際都市形成構想が、中央との関係において、いかなる経緯をたどったかを考察し、今後の沖縄のあり方および中央・地方関係の行方を展望している。

◆注

- (1) G. H. Elton, *Political History: Principles and Practice*, 1970 (エルトン『政治史とは何か』丸山高司訳、みずす書房、一九七四年)第一章参照。
 - (2) エルトン、前掲『政治史とは何か』八七頁。
 - (3) Richard J. Evans, *In Defense of History*, 1997 (エヴァンズ『歴史学の擁護——ポストモダンリズムとの対話』今関恒夫他訳、晃洋書房、一九九九年)。
 - (4) 成田龍一『近現代日本史と歴史学——書き替えられてきた過去』(中公新書、二〇二二年)。
 - (5) エヴァンズ、前掲『歴史学の擁護』一一九頁。
 - (6) エルトン、前掲『政治史とは何か』第五章、エヴァンズ、前掲『歴史学の擁護』第八章、Herbert Butterfield, *The Whig Interpretation of History*, 1931 (バターフィールド『ウィッグ史観批判——現代歴史学の反省』越智武臣他訳、未来社、一九六七年)第五章、升味準之輔『なぜ歴史が書けるか』(千倉書房、二〇〇八年)などを参照のこと。
- なお、これに関連して、次のバターフィールドの言葉は、現代にあつては、とりわけ戦争犯罪等を考える際には過度に樂觀的で、また因果関係の理解と道徳的判断とは別物であり、しかもこうした態度はある時代のある種の安楽さを反映しているにすぎないという意見があることは承知しているが、それでも歴史が政治に翻弄されるのを目の当たりにすると、時に読み返してみたくなることもある。「もしも歴史が、なにか人類の記憶のようなものであり、人間の過去を熟考する人間精神の表現であるとすれば、われわれは歴史の効用をば、対立を先鋭化させたり、古い党派的信条を正当化するためのものではなく、対立の奥にある統一を発見し、あらゆる生命をひとつの生命の一環と見る、そうした考えに立たねばならない」(バターフィールド、前掲『ウィッグ史観批判』一二二頁)。